

戯曲『ベルマン』執筆の背後にある亡命計画
-カール・ツックマイヤーの思惑と焦燥-

メタデータ	言語: jpn 出版者: 明治大学大学院 公開日: 2018-11-29 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 松澤, 智子 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10291/19752

戯曲『ベルマン』執筆の背後にある亡命計画

——カール・ツックマイヤーの思惑と焦燥——

Die Exilpläne hinter dem Drama “Bellman”

——Das Vorhaben und die Ungeduld Carl Zuckmayers——

博士後期課程 独文学専攻 2017年度入学

松 澤 智 子

MATSUZAWA Tomoko

【論文要旨】

ナチスによって作家活動が制限されている最中、カール・ツックマイヤーは学生時代から興味を持っていたスウェーデンの音楽家カール・ミカエル・ベルマンを題材にした戯曲『ベルマン』を執筆する。政権や時事問題に直接触れることがない史実を題材にした作品であるならば、ナチス政権下でも上演の可能性があるとしてツックマイヤーは考えたからに違いない。だが、ベルマンを題材にした本当の理由は、スウェーデンへの亡命計画があったからではないか。執筆を始めた頃、ツックマイヤーは日本人歌手の田中路子と出会っている。路子の夫は大富豪ユリウス・マインルで、路子を出演させることでマインルから資金援助を受けようという思惑から戯曲を書き始めたのではなかろうか。しかし、作品完成直前に路子との交流が途切れてしまい、マインルからの資金援助を断念せざるを得なかった。するとツックマイヤーは、出版社を経営するゴットフリード・ベルマン・フィッシャーに亡命の可能性を託す。頻繁に送った手紙からは、冷静に亡命を見定める姿と苦悩に耐えかねる姿が読み取れる。ヨーロッパ圏に留まりたいツックマイヤーであったが、ようやく入手できたアメリカ一時入国ビザで亡命するのであった。

【キーワード】 カール・ミカエル・ベルマン、スウェーデン、田中路子、ユリウス・マインル、ゴットフリード・ベルマン・フィッシャー

第1章 戯曲『ベルマン』に込めた想い

1. 戯曲『ベルマン』の原点「ベルマンの夕べ」

カール・ツックマイヤーは、ニーダーライン地方の民間伝説と中世の詩人であるトルバドールの詩を題材にした戯曲『ベルゲンの悪戯者』(1933)¹に続き、スウェーデンの詩人であり音楽家でもあるカール・ミカエル・ベルマン (Carl Michael Bellman, 1740-1795. 以下ベルマン) を題材にした戯曲『ベルマン』(1938) を執筆している。ツックマイヤーがベルマンを知ったのは、ハイデルベルク大学で行われていた文学の授業であった。教授は、才能豊かではあるが情緒不安定で自制できないベルマンの性格が問題であると批判的であったが、ツックマイヤーの好奇心はその性格に向けられていった²。この頃ツックマイヤーは、ドイツの民俗学者で美術史家でもあるヴィルヘルム・フレンガー (Wilhelm Fraenger, 1890-1964) の下で活動していたサークルに積極的に参加していた³。このサークルは、社会や政治問題の討論、読書会や映画の上映、演劇の上演などを行い、時にはベルマンが作った曲を皆で演奏しながら歌うこともあった⁴。そして1920年5月14日、居酒屋で「ベルマンの夕べ」が開催されたのであった。衣裳を劇場から借り、ベルマンの実話と架空の話の織り交ぜた即興劇を上演することで、ツックマイヤーはベルマンに対する好奇心をさらに強め、ベルマンを主人公にした作品を執筆したいという気持ちを抱き始める⁵。そして1938年初頭、場面に合わせて歌詞は変えているが、ベルマン作曲のメロディを演奏する戯曲を完成させ、ツックマイヤーは夢を実現したのである⁶。

まず『ベルマン』のあらすじについて簡単に紹介しておこう。自由奔放に生きる音楽家のベルマンとその恋人ウラは互いに愛し合っていたが、以前からウラに想いを寄せていたリンドクローナ男

¹ 1932年8月から書き始めて1933年11月に完成。Propyläen-Verlag から出版されたが、ツックマイヤー作品はドイツ国内での上演が禁止されていたため、1934年11月6日にウィーンのプロク劇場で初演された。Siegfried Mews, Die unpolitischen Exildramen Carl Zuckmayers. In: *Jahrbuch für Internationale Germanistik*, Reihe A. Kongreßberichte Band 3. Wolfgang Elfe, James Hardin und Günter Holst (Herg.), Deutsches Exildrama und Exiltheater, Bern, Frankfurt am Main, Las Vegas: Peter Lang, 1977, S. 139-148, hier S. 139.

² Vgl. Hans Wagener, *Carl Zuckmayer*, München: C.H. Beck, 1983, S. 21.

³ Vgl. Carl Zuckmayer, Wie “Ulla Winbald” entstand, in: *Moderna språk*, 59 (1965), Saltsjö-Duvnas: Modern Language Teacher’s Association of Sweden, S. 30-32, hier S. 31.

⁴ Vgl. Wagener, *Carl Zuckmayer*, a. a. O., S. 21.

Vgl. Zuckmayer, Wie “Ulla Winbald” entstand, in: *Moderna språk*, 59 (1965), a. a. O., S. 30-32, hier S.31.

⁵ Vgl. Gunther Nickel, Ulrike Weiss, Deutsches Literaturarchiv, *Carl Zuckmayer 1896-1977: ich wollte nur Theater machen*, Marbacher Kataloge 49, Marbach: Deutsche Schillergesellschaft, 1996, S. 262.

Vgl. Zuckmayer, Wie “Ulla Winbald” entstand, in: *Moderna språk*, 59 (1965), a. a. O., S. 30-32, hier S.31. チェロを弾くことが出来たツックマイヤーは、チェロ奏者で結核を患っているベルマンの父親モーヴィッツ役を演じた。

⁶ Carl Zuckmayer, Nachwort zu Ulla Winbald. In: Carl Zuckmayer, *Ulla Winbald oder Musik und Leben des Carl Michael Bellman*, Farnkfurt am Main: S. Fischer, 1953, S. 121.

爵の企てにより、期日までに借金を返さなかったベルマンは債務者拘留所に放り込まれてしまう。ベルマンは捕まる際に、自分の楽器を大事に保管するよう音楽仲間たちに頼むのであるが、その様子を見たウラは、ベルマンが自分より楽器を大切にしていると感じ、求婚を受けていた男爵と結婚する。ベルマンが釈放されると、彼の才能を聞きつけたスウェーデン王のグスタフ三世は宮廷歌手としてベルマンを招く。その頃、政治改革のために王から特権を取り上げられた貴族たちによる王の暗殺計画があった。再びウラに求愛し始めたベルマンを自分の宮廷に寄せ付けたくない男爵は、貴族たちが組織する改革を阻むグループの一員となり、王が殺害されるやいなや国家反逆の陰謀者としてベルマンを逮捕させる。一方ウラは、ベルマンと一緒にフランスへ逃げるため、仲間たちの助けを借りて船の手配をする。ウラは釈放されたベルマンと再会を果たすが、牢獄で肺結核を患ったベルマンは、船を目の前にしながらウラの腕の中で死んでいくのであった⁷。

2. 史実と創作を織り交ぜて

この作品のモデルとなったベルマンは、18世紀半ばにストックホルムに生まれた人物である。敬虔主義者の家庭教師の下で行き届いた教育を受けていたが、期待に反する生涯を送ることになる。ウプサラ大学を1年足らずで退学して国立銀行に勤めたが、借金を作り、1763年に債権者から逃れるために数ヶ月間ノルウェーで過ごすことになる。帰国後ベルマンは、優れた俗謡歌を書く詩人の才能を買われ、文芸と芸能を愛するグスタフ三世の知遇を得て宮廷秘書の称号と年金を賜る。しかし、生業を持たずに酒浸りの生活を送った結果、破滅的な借財を背負って債権者に追われ続けるのであった。死の前年に監獄につながれたこともあるが、酒場に入り浸ってはツィターを奏で、即興でスウェーデンの伝統をくむシャンソン風の詩や流行りの曲に合わせて歌い、散財しながら快楽をむさぼる生活を楽しんだ⁸。ベルマンの歌は、風刺、酒や女の歌、宗教的パロディー、劇的な歌が多いために評価が低い一方で、高く評価する者たちもあり、その支援者たちによって『フレードマンの書簡詩 (*Fredmans epistlar*)』(1790)、『フレードマンの歌 (*Fredmans sånger*)』(1791)が刊行された。この「フレードマン」は、かつて宮廷の時計師を務めたが、零落してしまった実在

⁷ ツックマイヤーは、印税は要らないから *Bellman* を書籍として出版して欲しいとフィッシャーに頼んだがその希望は願わず、1938年に劇場版としてスイスにあるフィッシャー社と関連する著作権株式会社から出版された。

Vgl. Nickel, Weiß, Deutsches Literaturarchiv, *Carl Zuckmayer 1896–1977*, a. a. O., S. 265.

この1938年に出版された劇場版は入手が困難であるため、書き改めて1953年された『ウラ・ヴィンブラートあるいはカール・ミヒャエル・ベルマンの音楽と人生 (*Ulla Winbald oder Musik und Leben des Carl Michael Bellman*)』を基にあらすじを記した。Vgl. Zuckmayer, *Ulla Winbald*, a. a. O.

⁸ ジャパンナレッジ：デジタル版集英社世界文学大事典

URL: <http://japanknowledge.com/lib/display/?lid=52310h0010346> (参照日：2018年4月18日)

ジャパンナレッジ：日本大百科全書(ニッポニカ)

URL: <https://japanknowledge.com/lib/display/?lid=1001000210956> (参照日：2018年4月18日)

フレデリック・デュラン著、毛利三彌、尾崎和郎共訳『北欧文学史』(白水社、1977)、58–59頁参照。

の人である。その他の登場人物もベルマンと交流があった裏社会の人間や落ちぶれた人たちである。ベルマンの歌は即興的なものにみえるが、実際は訓練された技巧と芸術感覚を秘めていた。詩人の個性を明確に表現し、情景が浮かぶ生き活きとした詩と軽快なリズム、人間の生の喜びと死の絶望、そして悲喜劇的なユーモア感覚が満たされている⁹。ツックマイヤーはベルマンの曲について、「ひとつの歌が常にたくさんのバリエーションを持って歌われ、時代を経て残っている」¹⁰と述べている。

もう一人の歴史上の人物であるグスタフ三世は、スウェーデン王に就くと現状の政治状況を打破するために新たな憲法を発令した。その憲法はそれまで以上に王に権力を与えるものであったため、反対勢力である貴族部会は納得しなかった。そこで王はクーデターを起こし、それを成功させると、権力を強固なものにした。しかし、このクーデターの3年後の1792年、反対派貴族グループの手によって王は命を落とすことになる¹¹。このグスタフ三世は芸術の保護者であると同時に、自らも多くの戯曲を書くほどの才能に恵まれた魅力的な人物であった。フランスの例に習ってスウェーデンアカデミーを創立したことで、王の下で文学と芸術が大いに栄えていく¹²。『ベルマン』のグスタフ三世殺害やベルマンを宮廷詩人に招く描写などは、これらの史実に基づいているのである。

3. 制限された作家活動と作品に込めた時事問題

政府の検閲批判をするツックマイヤーが目障りな存在であったナチスは、ツックマイヤーが『楽しいブドウ畑』（1925）で民族主義批判をし、『ケーペニックの大尉』（1932）で制服を介して軍を風刺したとして、この二作品をドイツ国内で上演禁止にした¹³。さらに1935年、ツックマイヤーの作品を国内で出版することも禁止にし、1938年には母方の祖父がユダヤ人であったことを理由

⁹ ジャパンナレッジ：デジタル版集英社世界文学大事典

URL: <http://japanknowledge.com/lib/display/?lid=52310h0010346>（参照日：2018年4月18日）

¹⁰ Vgl. Zuckmayer, Wie “Ulla Winbald” entstand, in: *Moderna språk*, 59 (1965), a. a. O., S. 30–32, hier S. 32. 日本でも歌われている「アチャパチャノチャ」のルーツと考えられる「グッベン・ノーア (Gubben Noak)」は、『フレードマンの歌』の35曲目に収録されている。

世界の民謡・童謡：「カール・ミヒャエル・ベルマン」

URL: <http://www.worldfolksong.com/songbook/sweden/bellman.html>（参照日：2018年4月18日）

¹¹ I・アイデション、J・ヴェイブル著、潮見憲三郎訳『スウェーデンの歴史』（文真堂、1988）、30–31頁参照。公平の度合いが高い憲法。例えば、農民は王家の領地を正式に買って自分の所有とすることができた。肩書のない平民も免税の土地を持つことができ、また、以前は貴族だけしか就けなかった高い官位に登用されることが可能になった。ただ、憲法にも社会構造にも幾らかの古めかしい要素が残っていたため、19世紀中に起こる政治的紛争はおおかたそれらの点をめぐる問題についてであった。I・アイデション、J・ヴェイブル著、潮見憲三郎訳『スウェーデンの歴史』（文真堂、1988）、34頁参照。

¹² アイデション、ヴェイブル（文真堂、1988）、31頁参照。

¹³ Vgl. Wagener, *Carl Zuckmayer*, a. a. O., S. 30–31.

1933年5月10日にベルリンで焚書を行った時、ツックマイヤーの作品もその対象になった。

に、ツックマイヤーの作品すべてを上演禁止にしてしまった¹⁴。この様な状況の下、ツックマイヤーはザルツブルク近郊ヘンドルフで暮らしていた¹⁵。ツックマイヤーの家を頻繁に訪ねたアメリカ人記者ドロシー・トンプソン (Dorothy Thompson, 1894-1961.)¹⁶ は、オーストリアもナチスに占領されると見越してアメリカに亡命するよう勧めていたが、オーストリアは安全で全く危険はないと信じていたツックマイヤーはそれを拒み続けた。また、家族ぐるみで付き合いをしていたシュテファン・ツヴァイクからも早くオーストリアから逃げるように強く忠告を受けたが、ツックマイヤーはこれも聞き入れることなくヘンドルフに暮らし続ける¹⁷。この頑な態度の裏には、歴史や伝説に基づく作品ならばまだオーストリア国内で上演できる機会があるというツックマイヤーなりの考えがあったからではなからうか。ツックマイヤーは『ベルマン』のあとがきに、「貴族権力と1772年に即位したスウェーデン王グスタフ三世、1792年に起こった貴族党に属する者たちによる国王殺害といった歴史的事実と一致することが作品の基本となっているが、この作品を歴史的出来事の描写として理解しないで欲しい。例えば、スウェーデンではめったに存在しない「リンドクローナ」という名前が男爵に付けられている様に、作品の筋や特徴の一部などは自由に創作している」¹⁸と、あくまでも史実を基にした創作であることを強調していることから推察できる。

しかし、史実と創作を組み合わせることで歴史的意義を失わせ、時事問題に背を向けている様に思える『ベルマン』であるが、この作品にはヒトラーに対する批判を巧みに隠した箇所が見受けられる。例えば、「寓話の王」と題された第三場で、「自分が作り上げる芸術作品が政治である」と考えている王に対し、ベルマンは「一人で狭い空間で考えているから、国家を芸術作品として考えるようになるのだ」と王を責める¹⁹。「王」を「ヒトラー」に、「芸術」をハーケンクロイツやナチ式敬礼などの「ナチスのデザインの匠」に置き替えることができるのではなからうか。かつて画家を

¹⁴ Vgl. Jang-Weon Seo, *Die Darstellung der Rückkehr*, Würzburg: Königshausen & Neumann, 2004, S. 52.

¹⁵ Vgl. Wagener, *Carl Zuckmayer*, a. a. O., S. 31.

ツックマイヤーは『楽しいブドウ畑』の成功を機に、豊かな自然が一望できるザルツブルク近郊の静かな村ヘンドルフに別荘を購入した。夏になると一家は、この村の素朴な人々と共に至極の時を過ごし、冬はベルリンの家で暮らした。Vgl. Ebd., S. 29-31.

¹⁶ ニューヨーク州生まれ。一次大戦後、婦人参政権運動に加わり、ジャーナリストの才能が開花。*Philadelphia Public Ledger* と *The New York Evening Post* の海外特派員。1920年にウィーンの特派員、1925年にベルリンで *Curtis-Martin-Blätter* の中欧支部の責任者になる。マルタ・シャート著、田村万里ほか訳『ヒトラーに抗した女たち：その比類なき勇気と良心の記録』（行路社、2008）、54-91頁参照。

ツックマイヤーとトンプソンは、1925年に知り合った。トンプソンは『楽しいブドウ畑』の劇働とインタビュー記事を米国新聞に掲載した。Vgl. Carl Zuckmayer, *Aufruf zum Leben*, Frankfurt am Main: S. Fischer, 1976, S. 20-25.

¹⁷ Vgl. Zuckmayer, *Als wär's ein Stück von mir*, Frankfurt am Main: S. Fischer, 1969, S. 61-64.

後にツックマイヤーは、「自分は目先のことだけ考え、鈍感だった。ツヴァイクが正しかった」と回想している。

¹⁸ Vgl. Zuckmayer, Nachwort zu Ulla Winbald, in: Zuckmayer, *Ulla Winbald*, a. a. O., S. 121.

¹⁹ Vgl. Ebd., S. 68-70.

目指していたヒトラーは、大衆の心を惹きつける方法の一つとしてモダンなデザインの重要性を充分に認識していたと考えられる。赤地の上の白丸の中にカギ十字を45度傾けた黒いハーケンクロイツをはじめとするシンボルマーク、スタイリッシュな制服、計算されつくした写真のアンクルや文字体などのグラフィック、さらにはショーと化した党大会までもが、ヒトラーの芸術作品のようだ。その芸術作品の中では、ナチスは寓話で、ヒトラーはその世界の王に過ぎないというツックマイヤーの皮肉が込められているようにも見える。さらにナチスは、党大会『意思の勝利』や1936年のベルリンオリンピックを収めた『民族の祭典』、『美の祭典』などのドキュメンタリー映画も製作している²⁰。これらの高い芸術性を武器に国民の関心を惹きつけ、知らぬうちに洗脳していくナチス、すなわちヒトラーの「政治＝芸術」をツックマイヤーは揶揄していたとも考えられる。

またこの戯曲では、ベルマンは一度も身分証明を持ったことがないこと、旅をして世界中を見たかったこと、そして世界中で故郷が一番良い場所であると語っている²¹。これらの言葉に亡命せざるを得ない状況であるツックマイヤー自身の心境が表れていると言えるだろう。『ケーペニックの大尉』では、主人公フォクトを通じて身分証明書の重要性を時事問題として全面的に取り上げているが、実際にツックマイヤー自身も亡命するために入国許可証が必要になってしまったことを考えると、フォクトの問題がいつのまにか作家自身の問題になってしまったと言えるのではないだろうか。

以前のように自由に作家活動ができない状況の最中、ツックマイヤーは『ベルマン』の執筆を始めるのであるが、それはオーストリアを中心に活躍していた日本人歌手の田中路子（1909-1988）との出会いがきっかけであったかもしれない。路子の人気と声楽家としての才能、そしてその魅力に惹かれて、歌と音楽を組み込んだ作品を書きたいという学生時代からの思いが叶うとツックマイヤーは考え、『ベルマン』執筆に至ったと想像できる。だが、果たして純粋な思いだけであったのだろうか。活動を制限されているツックマイヤーは、作品を上演する資金が必要である。路子の人気と才能以上に、彼女の夫である大富豪ユリウス・マインル（Julius Meintl, 1869-1944）の財力と人脈に期待したにちがいない。

第2章 田中路子との出会い

1. 大富豪ユリウス・マインルの妻田中路子

1936年春、『ケーペニックの大尉』の上演をユリウスとその妻である路子が観覧に来た。公演後に催された劇場主催のパーティの席で、ツックマイヤーはマインルに来てくれた礼を述べ、最近の劇場の傾向などの話をした。その時に路子を紹介され、挨拶を交わしたことから二人の交流は始ま

²⁰ 松田行正『RED ヒトラーのデザイン』（左右社、2017）、46-55頁、66頁、149-173頁、190-197頁、232-244頁参照。

²¹ Vgl. Zuckmayer, *Ulla Winbald*, a. a. O., S. 81, S. 117.

る²²。おそらくこの時、声楽家として経験を積みオーストリアを中心に人気を集めている路子を自分の作品に出演させることでマイルから協力が得られる、とツックマイヤーは直感したにちがいない。学生時代から創作を考えていたベルマンを題材にすれば歌う場面を存分に組み込むことができ、舞台上で路子を華やかに演出できると考えたとしても不思議ではない²³。

路子は、音楽活動に貢献した人物を記念するモーツァルテウムの碑に日本人として初めて名前が刻まれ、ベルリン映画祭の運営にも携わるなど文化交流の面で尽力した女性である。また、路子が築き上げた交友関係を大いに活用することで日独協会は設立できたのであった²⁴。歌手として、また女優として人生の大半をヨーロッパで過ごした田中路子とはどのような人物であったのか、簡単にその生涯を辿っておこう。

路子は、1909年7月15日に東京神田で生まれた。父は松江藩の士族出身で、帝展の審査委員になった日本画家の頼璋、母は広島藩の士族出身の政子である²⁵。1923年に関東大震災が起きた際に一時広島に疎開し、東京に戻ると1929年に東京音楽学校声楽本科に入学した。当時、オーストリアで公使を務めていた大野守衛（1879-1958）は路子の伯父にあたる人物で、路子の両親は大野を頼って路子をウィーンに留学させようと考えた。新交響楽団の指揮者をしていた近衛秀麿（1989-1973）に相談したところ、日本には本格的な演奏者がいないハープを勧められる。路子もそのつもりでウィーンに出発したのであるが、ハープのレッスンを始める数日前に見たオペラのプリマドンナの歌声にすっかり魅了されてしまい、声楽家志望に変更する。そしてウィーン国立音楽学校声楽科へ入学を果たすのであった²⁶。

留学当初は公邸で過ごしていた路子であったが、大野が知人のドイツ人に路子をあずけると、路子のドイツ語は著しく上達していく。さらに、そのドイツ人が路子を頻繁に舞踏会へ連れていったことで交友関係が広がり、路子は学校と社交界のそれぞれに満足しながら暮らすのであった²⁷。しかし一方で、学生の身分でありながら華やかな衣装を着てドイツ語で堂々と立ち振る舞う路子の姿は、当時ウィーンに在住していた日本人たちに反感を買われてしまう。公使館から強制送還の通知を受ける直前、路子はパーティで知りあったチェコ出身の大富豪でコーヒー王と呼ばれていたユリ

²² 角田房子『ミチコ・タナカ男たちへの賛歌』（新潮社、1982）、68-69頁参照。

²³ 路子の証言を基にした多くの資料には、この出会いを機にツックマイヤーと路子は恋人関係になると載っている。これが事実であるならば、ツックマイヤーの作品執筆の理由の一つとして挙げられるであろう。しかし、筆者は路子の証言以外に確証を得る資料を入手していないため、この点については本稿では取り上げない。

²⁴ 角田（新潮社、1982）、165頁、安富（弘文堂、2009）、218頁参照。

²⁵ 生家は千代田区駿河台鈴木町17。現在の神田駿河台二丁目。アテネ・フランセなどの専門学校が建っている。田中路子「情熱の趣くままに」瀬戸内晴美編『愛とその謳歌 愛の現代史4』（中央公論社、1984）、195頁、「東京市神田区全図」東京郵便局『東京市十五区番地界入地図：明治四十年』（人文社、1986）、安富成良「田中路子」植木武編『国際社会で活躍した日本人』（弘文堂、2009）、202頁参照。

²⁶ 安富（弘文堂、2009）、203-205頁参照。

²⁷ 同上、205-206頁参照。

ウス・マイルに助けを求めた。ウィーンに滞在し続けたい路子は、マイルに頼れば全てを解決してくれると思ったからだ。路子から相談を受けたマイルは、日頃から交流が深い英国大使館に頼み、日本国籍はそのままにオーストリアのパスポートを路子に与えるのである。それから間もなくしてマイルから求婚を受けた路子は、結婚してオーストリア国籍を得れば帰国しなくて済むという考えもあり、1931年3月31日にウィーン郊外で結婚式を挙げた。この時マイルは57歳、路子は21歳であった²⁸。

ウィーンで結婚生活を送りながら学生として大学に通い続ける路子に、マイルは金を惜しまずに最高の教師をつけた。その恵まれた環境と本人の努力の結果、路子は声楽家として頭角を現していく²⁹。上級生になると音楽学校に付属している劇場に出演できる制度があり、路子はオペラ『魔弾の射手』(1821)のエンヒェン役で初舞台を踏んだ。卒業公演で上演した『魔笛』(1791)では、パパゲーナの大役を得た。その後もオペラ『薔薇の騎士』(1910)に出演する活躍もみせる³⁰。1932年、大学卒業後間もなく初の主役として演じたオペラ『蝶々夫人』(1904)で成功を収め、路子の歌唱力、演技力、衣装の美しさなどが華々しく紙面で紹介された。その後も、ウィーン国立劇場をはじめ、チェコスロバキアやハンガリー、ユーゴスラビアなど8カ国で『蝶々夫人』を上演した。活躍の場が広がると同時に、社交界におけるマイル夫人としての路子の地位も確立していくのであった³¹。

注目を浴びる路子は、1935年にウィーン・フィルハーモニーが出演する『恋は終りぬ』で映画デビューを飾る。残念ながら路子の映画女優としての評価は高くはなかったが、『蝶々夫人』で人気となった路子の初出演映画ということで、オーストリアだけではなく周辺の国々でも大ヒットになった³²。そして、路子が自分の声量がオペラよりもオペレッタに向いていると考え始めるようになった頃、主演を務めたオペレッタ『ゲイシャ』(1936)³³と『ジャイナ』(1936)³⁴がウィーン

²⁸ 角田 (新潮社, 1982), 32-35頁参照。

²⁹ 安富 (弘文堂, 2009), 207頁参照。

³⁰ 角田 (新潮社, 1982), 47-48頁参照。

³¹ 同上, 49-58頁参照。

1933年に帰国した際、日比谷公会堂で近衛秀麿指揮の下、ヴェートーベン『第九交響曲』を独唱した。また日本青年館、大阪朝日公会堂、京都公会堂など各地の公演では、ウィーンの歌を中心に披露した。

³² 同上, 59-60頁参照。

映画の内容は、路子演じる日本人留学生ミナコが著名な老作曲家の熱い想いに気付かず、弟子の若い指揮者と恋をする。歌手であるミナコは老作家の新曲を歌って大成功するが、作家の事故死の後に想いを寄せられていたことを知り、恋人と別れて帰国する、というものである。

日本では1936年1月29日に帝国劇場、大勝館、武蔵野間で封切られた。「(広告) 帝国劇場ほか「ミモザ館」(トビス)「恋は終りぬ」(サッシャ)」『東京朝日新聞』1936年1月25日(朝刊)[縮刷版]

³³ 米国ミュージカル映画監督のジョージ・シドニー (George Sidney, 1916-2002) の作品。初演は1896年4月25日ロンドンのダリーズ劇場。Boosey & Hawkes: Opera,

URL: <https://www.boosey.com/pages/opera/moreDetails?musicID=102143> (参照日: 2018年4月18日)

³⁴ パウル・アブラハムの作品。詳細は後述。

の初演で大成功を取めた。『ジャイナ』は、12月にブルク劇場で初演されると3ヶ月のロングランになるなどヨーロッパで上演を繰り返した。さらに中南米諸国でも好評を博したのだった。路子はこれらの成功を機にオペラからオペレッタへと路線を変更し、その後も映画や舞台で活躍を続けていく³⁵。結婚してから10年後の1941年7月、マイルと離婚した路子は俳優のヴィクトル・デ・コーヴァ（Viktor de Kowa, 1904-1973）と再婚する³⁶。路子は親日家のデ・コーヴァのために日本の美術品を家に飾り、来客を着物で迎えて日本食を用意するなど日本文化を正しく紹介しようと努め、第二次世界大戦中は空爆で家を失った知人たちにベルリンの自宅を開放して食料や宿泊場を提供し、戦後は文化活動に力を注いだ³⁷。これらの活動の一つが、先に述べた日独協会設立である。

路子の活躍の裏には、夫マイルの存在があった。そのマイルはボヘミアの名家の出身で、父親のマイル1世がコーヒー輸入商として財を成した。父の商売をマイルが継ぎ、砂糖やカカオなどの食料品も扱うようになると、その店はオーストリアだけではなく中欧諸国やロンドンにも支店を持ち大富豪となっていく³⁸。1912年にビスケットやコーヒーなどを輸入する拠点をロンドンに置き、第一次世界大戦時には日用品を取り扱う任務を受け、1915年に「オーストリア政府商会」を設立する。戦後も事業を拡大して、オーストリアの経済界に欠かせない人物となるのであった³⁹。マイルが路子のために惜しみなく資金を出していたのは、声楽のレッスンだけではない。路子を主役にするために映画『恋は終りぬ』の製作費を出資し⁴⁰、オペレッタ『ジャイナ』は、路子のために作品を書くように直接パウル・アブラハム（Paul Abraham, 1892-1960）に依頼している⁴¹。アブラハムはハンガリー出身のオペレッタ作曲家で、1929年にベルリンに移住し、初期のトーキー映画の作曲家のひとりでもある⁴²。アブラハムの知名度は高く、特にアブラハムが作曲した

³⁵ 田中（中央公論社，1984），204-205頁参照。

角田（新潮社，1982），49-77頁参照。

例えば、映画『ヨシワラ（Yoshiwara）』（1937）、映画『異国の鳥（Zugvögel）』（1947）、映画『大使館のスキヤンダル（Skandal in der Botschaft）』（1950）で二番目の夫ヴィクトル・デ・コーヴァと共演、日伊合作映画『蝶々夫人』（1954）で八千草薫と共演、第八回帝劇ミュージカル『喜歌劇・蝶々さん』（1954）に主演などで活躍した。角田（新潮社，1982），164頁，180-182頁参照。

³⁶ デ・コーヴァは、1955年に映画化されたツックマイヤーの戯曲『悪魔の将軍（Des Teufels General）』にナチスのゲッペルスを模したシュミットーラウニッツ役で出演している。Edition Deutscher Film, *Des Teufels General*. (DVD)

ベルリンで挙げた結婚式にはマイルも出席し、路子の父親代わりの介添人として二人を祝福している。角田（新潮社，1982），115頁参照。

³⁷ 安富（弘文堂，2009），214-217頁参照。

³⁸ 角田（新潮社，1982），27頁参照。

³⁹ Bayerische Akademie der Wissenschaften, *Deutsche Biographie: Meinl, Julius*, URL: <https://www.deutsche-biographie.de/sfz60027.html>（参照日：2018年4月18日）

⁴⁰ 「田中路子」『文藝春秋』3月号（文藝春秋社，1936），232-233頁参照。

⁴¹ Vgl. György Sebestyén, *Paul Abraham*, Wien: Edition S, 1987, S. 69-72, S. 163.

⁴² Verlag der Österreichischen Akademie der Wissenschaften, *Oesterreichische Musiklexikon (oeml) online: Ábrahám, Paul*, URL: http://www.musiklexikon.ac.at/ml/musik_A/Abraham_Paul.xml（参照日：2018年4月18日）

オペレッタ『ビクトリアと軽騎兵』(1930)は人気だった⁴³。「私のママはヨコハマ生まれ」が歌われるこの作品は三幕構成で、その第一幕は在日アメリカ大使館の設定であった。マイルは、日本に関する知識をアブラハムが備えていると思っていたであろうし、それと同時に、路子を話題にさせるためには知名度と人気を持ち合わせたアブラハム以外に適した人物はいないと考えてもいたであろう。

当時、マイルが路子のために惜しまずに出費していることは容易に想像できる。作品を上演するための協力者を見つけなくてはならないツックマイヤーは、路子を作品に出演させることでマイルからの出資援助を得ようと考えたに違いない。そこでツックマイヤーは、ウラ役を路子にし、さらにマイルから路子出演の許可を得られるように、ウラが歌う場面を多くしたのではなかろうか。劇中には歌う場面が15箇所あり、その中の5曲でウラは歌う。さらに付け加えるならば、マイルが反ナチスの立場であることも踏まえたうえで、作品を執筆したのかもしれない。当時のオーストリア経済界の大物の一人であるマイルにヒトラーは協力を求めたが、マイルは拒絶したのである⁴⁴。先述したように『ベルマン』で反体制を連想させる場面を記している点は、資金援助を必要としている作家としての目論見でもあったとも考えられる。

2. 『ベルマン』日本公演の可能性

1931年の路子とマイルの結婚は、日本でも新聞記事になっている⁴⁵。そして1933年に路子が一時帰国した際に、日比谷公会堂で開催される近衛秀麿が指揮をする新交響楽団の音楽会で路子が『第九交響曲』の独唱をすることが決まると、このことが新聞で取り上げられるほどであった⁴⁶。また、同年9月20日に日本青年館で開催されたリサイタルで、路子が素晴らしいソプラノを披露したという記事も掲載されている⁴⁷。路子の主演映画『恋は終りぬ』が1936年に日本で上映された際にも新聞で取り上げられたが、「日本人の表情の貧しさ、堅さをまざまざと見せつけられた」⁴⁸、

⁴³ ベーター・パンツァー、ユリア・クレイサ著、佐久間穆訳『ウィーンの世界 欧州に根付く異文化の軌跡』(サイマル出版、1990)、68-69頁

⁴⁴ 角田(新潮社、1982)、78-81頁参照。

オーストリア併合後、ナチスは協力を拒否したマイルに対して幾度となく執拗な報復手段をとったが、マイルはそれらの迫害に耐え抜いた。

⁴⁵ 「ウィーンの世界長者と若き日本の歌姫の結婚」(縮刷版『東京朝日新聞』1931年4月7日夕刊)

⁴⁶ 「田中路子さんデビュー」(縮刷版『東京朝日新聞』1933年6月24日朝刊)

この独唱は、東京音楽大学講師であるマリア・トルが病気で出演できなくなった代役であった。

⁴⁷ 「田中夫人の獨唱會」(縮刷版『東京朝日新聞』1933年9月22日朝刊)

リサイタルは日本青年館他に、大阪毎日会館、京都市公会堂でも開催されている。角田房子『ミチコ・タナカ 男たちへの賛歌』(新潮社、1982)、55頁

⁴⁸ 「新映畫評“戀は終りぬ”」(縮刷版『東京朝日新聞』1936年1月25日朝刊)

映画『恋は終りぬ』は1月29日封切で、帝国劇場(日比谷)、大勝館(浅草)、武蔵野館(新宿)で上映された。同時上映は、監督ジャック・フェエデ、主演フランソワーズ・ロゼエの『ミモザ館』「広告」(縮刷版『東京朝日新聞』1936年1月28日朝刊)

「彼女は素人であり又、日本女性としても決して體格の立派な女性ではなかったが、ドイツ映畫俳優の間に伍しては全く壓倒され通しで手も足も出ない」⁴⁹と評価は厳しいものであった。歌手としては好評を、女優としては酷評を受ける路子であったが、いずれにせよ路子が日本でも注目される存在であったことは間違いないようだ。もし路子が『ベルマン』に出演していたら、日本でも上演される可能性があったのではなかろうか。

ツックマイヤーは、ヨーゼフ・ハルペリン (Josef Halperin, 1913–1990) 宛てに書いた1937年12月29日付の書簡に、「間もなく完成する『ベルマン』が『ケーペニックの大尉』以上に話題になるであろう。3月にウィーンで上演する予定である⁵⁰」と書いている。この書簡から1938年初頭には作品が完成していたと考えられる。まさにこの時期、日本ではドイツ語文学翻訳書の出版数が著しく増加している。1930年代後半から増加傾向が表れ、1936年から1943年は毎年およそ20冊から45冊の翻訳書が出版されていた程、ドイツ文学への関心が強まっていたのである⁵¹。この翻訳の増加は、日本の演劇事情と深く結びついている。1924年に旗揚げされた劇団「築地小劇場」が日本の新劇を確立し、けん引していく。この劇団を立ち上げた小山内薫、土方与志、青山杉作に加えて、ドイツで演劇学や演出を学んだ村山知義や千田是也たちの活動により、翻訳劇も積極的に上演されて新劇は急速に発展していった⁵²。翻訳劇を観ることに抵抗が無く、ましてや路子が出演となれば、日本で『ベルマン』が上演できる環境は整っていた。さらに、1931年に日本で上映されるや否や大人気となった映画『嘆きの天使』のシナリオを担当した一人がツックマイヤーである。その人物が来日するとなれば、映画ファンから大歓迎を受けたであろう。ツックマイヤーはヨーロッパ以外に亡命する気持ちはなかったと述べているが、もし日本公演をしていたら、歓迎に気を良くして、日本に亡命した可能性もあったかもしれない⁵³。しかし、路子の出演は実現しなかった。路子は映画『ヨシワラ』(1938)の撮影をきっかけに、共演した早川雪洲(1886–1973)と1937年の

⁴⁹ 「広告」(縮刷版『東京朝日新聞』1936年1月28日朝刊)

⁵⁰ Vgl. Carl Zuckmayer an Josef Halperin: Briefwechsel 1925–1963, in: Gunter Nickel und Erwin Rotermund (Hrsg.), *Carl Zuckmayer-Josef Halperin Briefwechsel*, Zuckmayer-Jahrbuch, Band 10, 2009/2010, Göttingen: Wallstein, 2010, S. 15–94, hier S. 49–50.

ハルペリンは、ツックマイヤーが学生時代に参加していたサークルの仲間。1920年代は、『新チューリッヒ新聞 (Neuen Zürcher Zeitung)』の通信員としてベルリンに住み、1930年代以降はチューリッヒで暮らす。『ベルマン』と『悪魔の将軍』の初演を見に来ている。Vgl. Zuckmayer, *Als wär's ein Stück von mir*, a. a. O., S. 73, 496, 646.

⁵¹ 藤井明彦「ドイツ文学翻訳概観」(2007), 日本独文学会,
URL: <http://www.jgg.jp/modules/d3downloads/index.php?page=singlefile&cid=1&lid=12> (参照日: 2018年4月18日)

⁵² 神品芳夫ほか編『日本におけるドイツ語文化回顧展: IVG東京大会記念展覧会』(郁文堂, 1990), 83–86頁参照。

⁵³ ツックマイヤーはヨーロッパ圏内に亡命しなかった。1939年にアメリカに亡命するのであるが、それ以前は、アメリカに良いイメージを抱いていなかった。同時に、英語が話せないツックマイヤーにとって、会話を練習がとても恥ずかしい事であった。Vgl. Carl Zuckmayer, *Amerika ist anders*, Frankfurt am Main: Der Monat, Auflage: Sonderdruck Nr.34, 1953, S. 5.

秋からパリで同棲を始めてしまったからである⁵⁴。路子との親交が途絶えたツックマイヤーは、期待していたマイルの協力が得られないと判断したかのように、自分の作品を出版してくれているゴットフリード・ベルマン・フィッシャー（Gottfried Bermann Fischer, 1897-1995. 以下フィッシャー）に協力を求め始める。

第3章 『ベルマン』上演と亡命 ～期待と不安～

1938年3月11日、ツックマイヤーは『ベルマン』の稽古初日のために俳優たちと早朝からヨーゼフシュタット劇場にいた。午後、稽古を終えて外に出ると街の様子はがらりと変わっており、夕方になるとシュシュニック首相自らが辞任に至る経緯をラジオで国民に伝えた⁵⁵。ナチスがオーストリアを併合すると、『ベルマン』は劇場の公演演目から削除されてしまい、ツックマイヤーは上演できる劇場を探さなくてはならなくなった⁵⁶。さらに不運は続く。ヘンドルフの家はゲシュタポに没収され、文壇からの追放の末に投獄されるかもしれない危険を感じたツックマイヤーは、一刻も早く亡命をせざるを得ない状況に陥る。身一つでヘンドルフを去り、スイスのシャルドネに宿を借りて生活することになった⁵⁷。社会状況が悪化するにつれ、さらに遠方へ逃れることが必要になり、ツックマイヤーはストックホルムで出版社の経営を続けているフィッシャーを頼るのであった。

そのフィッシャーがストックホルムに移転した背景にもナチスの影がある。1886年晩夏にウィーンからベルリンに書店見習いとしてやって来たザミュエル・フィッシャー（Samuel Fischer, 1859-1934）が立ち上げたS.フィッシャー社を、娘婿であるフィッシャーが1925年から引き継いだ。経営は順調であったが、1933年にナチスが政権を握ると一変する。1936年、ペーター・ズーアンプの下でヘッセやベンなどの活動が禁止されていない作家の著作権でベルリンに留まって経営を続けるS.フィッシャー社と、トーマス・マンやホフマンスタール、ツックマイヤー、ツヴァイクの著作権で経営をするゴットフリード・ベルマン・フィッシャー社に分けなくてはならなくなる。フィッシャーは新会社を設立するためにウィーンに移ったが、ナチスのオーストリア併合によりウィーンでも経営ができなくなり、ストックホルムを新居地にして再開することになった⁵⁸。フィッシャーがストックホルムを移転先に選んだ理由として、当時スウェーデンが中立政策をとっていたことが挙げられるだろう。ヒトラーが権力を握って軍事力強化に踏み切った時、スウェーデンは防

⁵⁴ 「雪洲と路子さん愛の巢パリの社交界を賑はす」『東京朝日新聞』1937年12月1日（朝刊）〔縮刷版〕と雪洲の生活は、雪洲の不誠実な態度により半年足らずで終える。ツックマイヤーと路子が再会するのは、第二次世界大戦が終わった1945年である。角田（新潮社, 1982）, 96-102頁, 152-154頁参照。

⁵⁵ Vgl. Zuckmayer, *Als wär's ein Stück von mir*, a. a. O., S. 29.

⁵⁶ Vgl. Nickel, Weiß, *Deutsches Literaturarchiv, Carl Zuckmayer 1896-1977*, a. a. O., S. 264-265.

⁵⁷ Vgl. Zuckmayer, *Als wär's ein Stück von mir*. a. a. O., S. 25.

⁵⁸ S. Fischer Verlag: URL: https://www.fischerverlage.de/verlage/s_fischer（参照日：2018年4月18日）

その後、1940年にドイツ軍がスウェーデンに対して攻撃を始めると、フィッシャーはスウェーデン警察に拘束されてしまう。釈放後フィッシャーはニューヨークに逃げ、そこからストックホルムに経営の指示を出していたのであった。

衛を強化した。そしてフィンランドやオランダ、スイスといった国々と共に中立の立場を保っていたのである⁵⁹。もしかしたら、ツックマイヤーは中立国であったスウェーデンに亡命する可能性も視野に入れて、音楽家ベルマンを題材にした作品を思いついたのかもしれない。

ドイツ語圏での生活を望んでいたツックマイヤーは、スイスの市民権を得ようとしていた。しかし、ナチスの迫害から逃れようとした人々から亡命先に最適な国であると思われていたスイスは、政治的亡命者を優先して受け入れていた。そのため、ツックマイヤーは一般人と同じく短期間の滞在許可証しか得られないことがわかった⁶⁰。フィッシャーから経営を切り替えるためにアメリカでも出版する考えがあることを聞いたツックマイヤーは、アメリカへの亡命を考えるようになる⁶¹。「標準規定で間違った実利主義の国⁶²」、「伝統も文化も無く、美や形式を追究する欲も無い国⁶³」という印象を持ち、アメリカへの亡命を考えていなかったツックマイヤーであったが、1938年4月11日付でフィッシャー宛てに次の様な手紙を書いている。

[...] いかなる場合でも我々は慎重に、計画的に、そして少しずつ準備をしてアメリカに基盤を築くべきであると真剣に考えています。確かな基盤が無いまま、急いでアメリカに行くことは非常に不利になるかもしれないと強く感じています。(中略)。ハリウッドでは、アメリカに渡った人たちが契約更新を要求する際に、解除を言い渡されています。ニューヨークも同様です⁶⁴。 [...]

当時、ハリウッドやニューヨークに渡った亡命者たちが雇用契約更新を要求する際に、契約の解除を言い渡されていることが多く、経済的な基盤をしっかりさせることが、亡命するために重要な点であったと言えよう。ツックマイヤーは友人を頼りにし、かつ、慎重に亡命を計画していたことがわかる。

フィッシャー宛の他の手紙では、「アメリカで『ベルマン』を、場合によって『ケーペニックの大尉』も上演できる劇場を見つけてください。でも見つけた際には、私抜きで契約しないでください⁶⁵」と劇場探しを頼んでいる。自分不在のまま作品に関する契約を結ばないように念を押す点から、自ら交渉できない辛さと苛立ち、同時に作家としてのプライドも伝わってくる。アメリカでの上演を切望する様子から推察すると、ツックマイヤーにとって『ベルマン』上演の意味は、ナチス

⁵⁹ アイデション、ヴェイブル (文眞堂, 1988), 63-64頁参照。

⁶⁰ Vgl. Seo, *Die Darstellung der Rückkehr*, a. a. O., S. 52-53.

⁶¹ Vgl. Zuckmayer: *Als wär's ein Stück von mir*. a. a. O., S. 117.

⁶² Vgl. Zuckmayer, *Amerika ist anders*, a. a. O., S. 5.

⁶³ Ebd.

⁶⁴ Vgl. Reiner Stach (Hrsg.), *Gottfried Bermann Fischer Brigitte Bermann Fischer Briefwechsel mit Autoren*, Frankfurt am Main: S. Fischer, 1990, S. 301-302.

⁶⁵ Vgl. Ebd., S. 303-305.

批判をする目的から次第に亡命するための手段へと変わったのではなかろうか。しかし、「もし市民権を得たならば、スウェーデンで暮らすことはできるのでしょうか。ロンドンやニューヨークでも上演するけれど、活動の中心はスウェーデンに置き、偉大な仕事をする…それが私の理想です⁶⁶」、「スウェーデンに移住して家を見つけることは、私も妻も非常に嬉しい事だと思っています。(中略)私は街の中心地ではなくて郊外に住みたいです⁶⁷」というように、市民権を得て活動の中心をスウェーデンに置いて静かな環境で気持ちよく仕事がしたい、つまりヨーロッパに残りたい気持ちを前面に表した手紙も書いている。先が見えないことへの不安が大きく、アメリカに行くことを躊躇しているツックマイヤーの様子も読み取ることができる。

1938年11月17日、ついに『ベルマン』はチューリッヒ劇場で初演を迎えるのであった⁶⁸。作品が上演できた理由の一つとして、当時チューリッヒに漂っていた気風を重視しなくてはならない。それは、ドイツ語で上演する演劇をナチスの影響から守らなければならないという義務感があったことである⁶⁹。ツックマイヤーは『ベルマン』が上演されている間、これがドイツ語圏の劇場で上演できる最後であると感じていた⁷⁰。上演は果たせたものの、それ以上の展開がないまま4ヶ月が経った3月8日、精神的に追い詰められたツックマイヤーは手紙を書く。それは、ロンドンでアレキサンダー・コルダ (Alexander Korda, 1893-1956) と映画の仕事が続けているツックマイヤーに、小説執筆に集中するべきであると忠告するフィッシャーへの返事であった。

[...] あなたは、小説に集中するべきだと助言してくれました。その通りです。しかし、今、どうやってそれを実行すればいいのでしょうか。(中略)自分の意思を表現する機会が与えられない場合、いったい私は何をすべきなのでしょう。私はあなたに言いたい。もし私が映画の仕事に再び着手しなければならなくなった場合は、小説や新しいエッセイ、新しい作品を一行も書けなくなります。今、まさにその状態になってしまったのです。映画の仕事で短期間に高額を稼ぐことは不可能になったのです⁷¹。 [...]

⁶⁶ Vgl. Ebd., S. 305-306.

⁶⁷ Vgl. Ebd., S. 306-310.

⁶⁸ 主人公のベルマン役はカール・パリヤ (Karl Paryla, 1905-1996) が、ウラ役はマリオン・ヴュンシェ (Marion Wunsche, ???-1981) が演じた。

⁶⁹ Vgl. Katrin Weingran, „Des Teufels General“ in der Diskussion, Marburg: Tectum Verlag, 2004, S. 20-21. 戦後、ドイツ演劇界が敏速な発展を遂げた理由にもチューリッヒが欠かせない。ドイツ語で上演する演劇を守ろうという義務感には戦後になっても変わらず、進駐軍に統治されているドイツ国内で執筆している作家の作品をチューリッヒ劇場で上演できるように支援していた。この活動は、経済的な援助と並んで芸術的な視点においても大きな意味があり、上演できた作家は破壊されたドイツで自分が進むべき道を比較的早く見つけることができた。

⁷⁰ Vgl. Zuckmayer, *Als wär's ein Stück von mir*, a. a. O., S. 99.

⁷¹ Vgl. Stach, *Briefwechsel mit Autoren*, a. a. O., S. 314.-317.

出版も上演もできない状況下のツックマイヤーは、自分を表現するための執筆活動ではなく、生活費を稼ぐために働いている。新しい作品を一行も書けない状態になっていることは事実で、家族と一緒に生活するために幾つもの映画製作に携わっている。映画を一本仕上げれば高額報酬を得られた映画全盛期は、もう過去のものとなってしまった。なす術がない状況を、ツックマイヤーは訴えている。この手紙から2週間後の3月24日、ツックマイヤーはアメリカへ亡命する準備ができたことを伝える、穏やかで、前向きな手紙を書く。

[...] 私はスイスから去る決心をしました。(中略)。手に入るビザが一時入国許可のみであったとしても、アメリカに行く決意をしました。このビザをヴァン・ルーンともう一人の知人を介して手に入れることができます。(中略)。スイスでの静かな夏をきっぱりと諦めました。もがき苦しむ生活よりもアメリカに行くことを選びます。アメリカに行って、おそらく田舎にいるヴァン・ルーンの近くで、小説執筆に適した静かな場所を見つけることができるでしょう。場所と確かな安全を提供してくれる人を見つけたならば、そこに行くべきだと考えています⁷²。 [...]

ヨーロッパ圏内に留まることを諦めてアメリカに亡命する決意をしたツックマイヤーだが、それは妻アリス (Alice Herdan-Zuckmayer, 1901-1991) の強い希望があったからである⁷³。ツックマイヤーを毎日見ている妻として、執筆できない状況から夫を救いたかったに違いない。ナチスから離れるためだけではなく、友人も多くいるアメリカに亡命することが、ツックマイヤーにとって一番良いとアリスは判断したのであろう。この手紙の「もう一人の知人」は、アメリカ人記者のトンプソンを指し、「ヴァン・ルーン」は、既にアメリカに亡命していたオランダ人の作家ヘンドリック・ヴィレム・ヴァン・ルーン (Hendrik Willem van Loon, 1882-1944, 以下ヴァン・ルーン) のことである。ヴァン・ルーンは早くからアメリカに移住し、コーネル大学を卒業すると1911年にミュンヘン大学で博士号を取得した。その後、アメリカの大学で歴史を教えていた人物である⁷⁴。ヴァン・ルーンはベルマンについて研究するため (後にベルマンの詩と叙述を英語に翻訳し発行した)、1938年にストックホルムに短期間滞在していた。その時にフィッシャーと知り合い、ツックマイヤーがベルマンに関する作品を書いていることを知ったヴァン・ルーンが、スイスに滞在していたツックマイヤーを訪ねたことで二人の交流が始まる⁷⁵。友人たちが身元保証人になってくれたおかげで、ツックマイヤーはビザを入手することができた。そして1939年6月、ツックマ

⁷² Vgl. Ebd., S. 317.-318.

⁷³ Vgl. Seo, *Die Darstellung der Rückkehr*, a. a. O., S. 16.

⁷⁴ ジャパンナレッジ: デジタル版集英社世界文学大事典

URL: <https://japanknowledge.com/lib/display/?lid=52310h0001061> (参照日: 2018年4月18日)

⁷⁵ Vgl. Zuckmayer, *Als wär's ein Stück von mir*, a. a. O., S. 548-550.

イヤーは家族と共にオランダのロッテルダムからアメリカに向けて出航したのであった⁷⁶。

以上述べてきたことから、戯曲『ベルマン』はツックマイヤーにとって重要な役割を担う作品であったといえよう。当時の社会状況下で、反ナチスの作家が活動をするには、自分の力以外にも、いかに人脈を増やし、いかに協力を得るかも必要不可欠なことであっただろう。路子と知り合ったことで、ツックマイヤーがどれ程の期待をしたかを想像することは難しくない。それと同様に、マインルからの協力を得られなくなった時のツックマイヤーが、どれ程の落胆をしたかを想像することもまた然りである。その後、ツックマイヤーはフィッシャーを頼る。フィッシャーはアメリカでの上演に尽力するのであるが思い通りに進展せず、ツックマイヤーの亡命に繋げることはできなかった。ヨーロッパ圏に居続けたい思いと、新天地アメリカに亡命するべきか否かという葛藤、絶えず続く経済的な困窮によりツックマイヤーは精神的な弱さを見せていく。そのような時期にツックマイヤーのもとを尋ねてきた人物が、ヴァン・ルーンである。ツックマイヤーは、『ベルマン』の公演旅行を機に亡命するという計画を実現することは出来なかった。しかし、詩人ベルマンを介してヴァン・ルーンと知り合うことができたという事実からみると、戯曲『ベルマン』がツックマイヤーの亡命計画を最終的に成功に導いたと言えるのではないだろうか。

⁷⁶ Vgl. Wagener, *Carl Zuckmayer*, a. a. O., S. 33.